

(2) 古代の東海道の成立と島田（奈良・平安時代）

7世紀半ば、朝鮮半島の政情の変化を受けて大和朝廷の中央集権化が進み、全国が五畿七道の行政区に編成され、本市を含む太平洋沿岸の東日本は東海道とされました。さらに国、郡、里に分けられると、市の中央部を流れる大井川は駿河国と遠江国を隔てる国境となりました。古墳時代からのムラやクニは里(郷)や郡に編成され、ムラのリーダーは里長に、複数のムラをまとめるリーダーは郡司に任命されました。時代は下りますが、10世紀中頃に書かれた『倭名類聚抄』に、大井川左岸の駿河国志太郡大長郷（現・相賀・牛尾地区）、大津郷（大草・尾川・落合・野田地区）、葦原郷（阿知ヶ谷地区）の地名が見え、右岸の遠江国秦原郡質侶郷（金谷・五和地区）や駅家郷（初倉地区）の地名があり、7世紀後半から8世紀にかけて、現代に繋がる行政区が設置されました。川根地区の大井川右岸は元慶5（881）年に磐田郡を分割して置かれた山香郡の与利郷として編成されました。

また、都から各国に地方行政官の国司が派遣され、地方からは都に税を納めるための交通路（東海道）が整備されました。10世紀にまとめられた『延喜式』には、牧之原台地の初倉地区に「遠江国初倉駅」の記述があり、官人が公文書を継送りするため馬を乗り継いだ駅家が置かれたことが分かっています。同地区の宮上遺跡で奈良時代の住居跡から「驛」と墨書された土器が、隣接する青木原遺跡で、役所で使われるような円形の硯（円面硯）が出土しています。文化面ではそれまでの古墳に代わって地方豪族の氏寺が建立されるようになりました。初倉地区では瓦葺きの金堂や塔の伽藍を配した寺院（竹林寺廃寺）が天平年間（729～749）に、大津地区では天平宝字3（759）年に鶴田寺が建てられました。

奈良時代からすでに進んでいた口分田等の私有地化は、地方に赴任した国司らのもとでさらに進み、各地に荘園が形成されました。やがてこれらの荘園は朝廷への納税を避けるため、有力な寺社や藤原氏の摂関家、上皇など権門勢家に寄進され国家の支配から離れていきました。

大井川右岸の質侶郷は、11世紀初めに遠江守として赴任した大江公資の私領（荘園）となりました。間もなく太政大臣藤原道長の六男長家にこれを寄進し、自らは領家として国司の任を離れても質侶荘からの収入を得るなど、平安時代の質侶荘は貴族社会を支える荘園制度に組み込まれていきました。

11世紀半ば、大津郷に伊勢神宮の荘園である大津御厨が置かれました。大津谷川に面する居倉遺跡から「大津」と記された木簡が発掘調査で見つかっています。また、この頃伊太丘陵では灰釉を施した陶器の生産が盛んで、50基もの窯跡が確認されています。

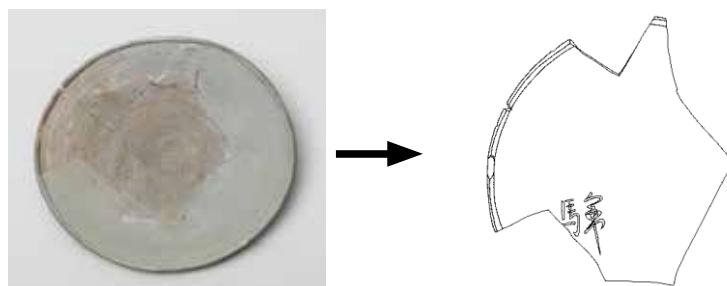


写真 1-11 宮上遺跡出土墨書土器「驛」



図 1-15 奈良・平安時代の遺跡

(3) 大井川両岸の荘園と武士の台頭（鎌倉～室町時代）

天皇や貴族の権威による政治体制から武力による政治体制に移行した12世紀末は、社会が大きく変化した時代でした。『吾妻鏡』によると、建久元（1190）年には頼朝が義経追討の奥州征伐から京へ向かう途中、宿泊した場所として「嶋田」の地名が初めて登場し、その後島田の名は東海道の大井川左岸の重要な宿として知られていきました。

奈良時代に整備された交通路の駅家は廃れ、大井川の渡渉ルートは牧之原台地が東に張り出した鎌塚付近を渡渉地点にするなど次第に北上していきました。また、本市と掛川市の境界に位置する小夜の中山は大井川とともに難所とされ、13世紀前期の「新古今和歌集」に多くの歌を残した西行がこの地を訪れ、旅情を歌に詠んでおり、後世、東海道を旅する多くの文人墨客が小夜の中山で詩歌を残しています。

13世紀後半、二度の蒙古襲来を退けた武士の多くは、満足のいく恩賞を受けられず、北条氏一門による専制政治に不満を持っていました。14世紀前半になると後醍醐天皇は彼らを取り込んで蜂起し、鎌倉幕府を倒して建武の新政を行いました。建武2（1335）年、北条氏の遺児北条時行が起こした中先代の乱で、北条氏と天皇側の足利尊氏が小夜の中山で激しく戦いました。その後、建武の新政に不満を持った尊氏は新たに別の天皇を立てて争い、南北朝の争乱が始まり、さらに観応元（1350）年には尊氏とその弟の直義との間でも争いが勃発し、各地で激しい戦いが繰り広げられました。観応3（1352）年に直義派の佐竹兵庫助が立て籠もった野田（大津）城を尊氏派の今川範氏が攻め落とし、今川氏の駿河進出の足掛かりとなりました。

14世紀末に南北朝が統一されると、室町幕府から駿河・遠江の守護に任じられた今川氏は、地方の侍たちを徐々に従えていきました。そして両国の平定に乗り出す拠点を藤枝、さらに15世紀前半には駿府（静岡市）に移して、領国支配を推し進めました。この結果、東海道を抑える今川氏は京都の幕府側としばしば対立した鎌倉公方をけん制する意味で重視され、幕府内で一目置かれるようになりました。

戦乱が続く中、今川氏の支配が及んだ大津地区には範氏の菩提寺である慶寿寺が建てられ、金糸を用いた豪華な絹本着色釈迦十六善神像が寺宝として伝わっています。また、この頃、寺社で行われた祭礼で、村人の楽しみとしてユーモラスな舞が奉納されるようになり、東光寺の猿舞は、京都で流行した猿田楽の流れを汲む中世の芸能として現在も人々に親しまれています。



写真 1-12 慶寿寺 絹本着色釈迦十六善神像



写真 1-13 猿舞



図 1-16 鎌倉・室町時代の遺跡

(4) 今川・武田・徳川の興亡（戦国・安土桃山時代）

15世紀後半、足利将軍家の後継者争いに幕閣の権力闘争が絡んで、東西両軍に分かれて戦う応仁の乱が起こると、各地で勢力を伸ばした戦国大名が入り乱れて戦いました。駿河国の守護であった今川義忠は遠江を狙って斯波氏と争い、その一派であった勝間田氏、横地氏を攻撃し、勝利を得たものの敗残兵に討たれてしまいました。義忠の息子氏親は、のちに幕府から正式に遠江国の守護に任じられ、遠江から斯波氏を追い出し駿遠両国を支配しました。さらに、氏親の死後、家督争いに勝利した義元は甲斐の武田氏、伊豆の北条氏と姻戚関係によって同盟を結ぶ一方、三河にも領地を拡大していました。

しかし、永禄3（1560）年に京を目指した義元が桶狭間で織田信長に討たれると、同盟は崩壊して武田信玄が駿河に攻め入り、この地域の支配は武田氏へと移っていました。天正元（1573）年、武田信玄の息子勝頼は遠江への勢力拡大のため、西は小夜の中山を監視でき、東は大井川越しに志太平野を見下ろす東海道に面した牧之原台地に諏訪原城を築かせました。

三河に戻り織田信長と同盟を結んだ徳川家康は、遠江に侵攻し、天正3（1575）年に長篠・設楽原の戦いで武田勝頼に勝利すると、その勢いのまま諏訪原城を攻め落とし牧野城と改名しました。家康の支配が大きく広がると、駿遠の境にあった牧野城は役割を失い、天正18（1590）年頃には廃城になりました。

豊臣秀吉による天下統一後、この地を治めていた徳川家康が関東へ移ると、大井川左岸は中村一氏、右岸は山内一豊の領地となりました。この頃、相賀の牛尾（駿河）山を開削して右岸の横岡丘陵と結ぶ堤防を築いて大井川の流路を変える河川工事（天正の瀬替え）が行われました。これにより大井川の両岸に新たに耕作可能な土地が広がりました。

戦国・安土桃山時代の社会状況を反映して、この頃、島田では盛んに刀や槍などの武具が作られました。特に五条義助の刀剣類は秀作として知られています。また、茶の湯文化の隆盛もあいまって金谷地区の横岡では志戸呂焼が盛んに作られ、茶碗や水指などの茶道具は茶人や大名に珍重されました。



写真 1-14 諏訪原城跡

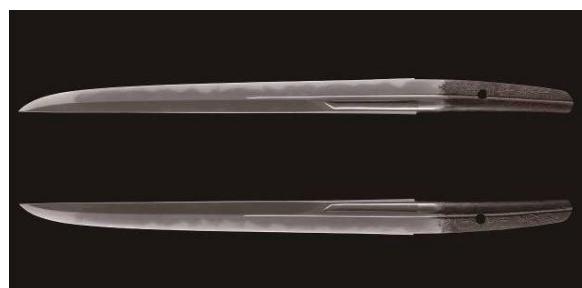


写真 1-15 五条義助の刀剣類（短刀）



写真 1-16 志戸呂焼（水指）



写真 1-17 牛尾（駿河）山



図 1-17 戦国・安土桃山時代の遺跡